日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN

第84号（2018年９月１日）

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂１-３東京理科大学１号館1603A研究室内
日本ハーディ協会　jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 石井有希子　sharanoka@gmail.com

Dorchester の William Barnes 像
（今村紅子氏撮影：2011 年、初秋）

ハーディとニューマン

粟　野　修　司

ジョン・ヘンリー・ニューマンはある時期まで確かにハーディの導き手であった。「たえなる道しるべの光」として闇夜を歩くがごとく人生を歩む彼を導いた。お前の脳みそは「中型のウサギの脳みそよりも小さい」という最大級の批判を、このオックスフォード運動の指導者に投げかけたトマス・カーライルほど辛らつではないが、後半生にはハーディもニューマンに批判的になった。結局、ハーディはニューマンに導かれながらも、最後まで同じ道を辿ることがなかった。なぜだろうか。

若い頃のハーディはニューマンの熱心な読者であった。その傾倒ぶりたるや崇拝に近かった。ハーディのメモをまとめた*Literary Notes*の2番目から19番目までの記事は*Apologia Pro*

*Vita Sua*からの切り抜きである。数の多さが彼のニューマンへの心酔ぶりを証明している。ハーディのメモ類をまとめた*Life of Thomas Hardy*では自身の言葉でニューマンを賞賛している。1865年の記事では、*Apologia*について文体と論理を賞めながら、その理由として「三段論法(syllogism)」ではなく「確率収束（converging probabilities)」に基づいているからと付け加えている。原文はこうなる―

> "A great desire to be convinced by him, because Moule likes him so much. Style charming, and his logic really humane, being based not on syllogisms but on converging probabilities."

理由は不明だが、出だしの一文がトマス・ハーディ全集に収められた『生涯』では訳されていない。ハーディは「彼［＝ニューマン］によって、自分に確信を持たせてほしいと強く願う」と書いているようだ。国教会の牧師を目指していたとされるこの時期にニューマンを読みながら、まだ聖職への意欲十分とは言えない自分を鼓舞してほしいと考えたのだろう。引用記事は、*Apologia*の「絶対的な確信は共起し収斂する蓋然性を集めた結果である」というニューマンの言葉をふまえていると思われる。1860年代半ばのハーディはまだ確信を持てなかった。三段論法は一般論から具体的な例を導くという道筋を辿って結論へ行き着くが、確率収束は複数の仮説を立てることから始め、結論を導く。*A Grammar of Assent*（1870）でニューマンは「確率収束による証明」と題された章で、「確率収束」と「三段論法」を並べてこう書いている―「もし私が改宗するためにペーリー（William Paley、英国の神学者･功利主義哲学者［1743-1805］）の論法を使ってみませんかと頼まれたとしたら、はっきりと答えますよ、あのそつのない三段論法で改宗したいとは思いませんねと。」このように、確率収束はニューマンお気に入りの論理的推論であって、ハーディもそれを好んでいたようだ。三段論法ではニューマンは改宗せず、ハーディも確信を持てなかったが、確率収束ならニューマンの改宗もハーディの確信も可能だった（かもしれない)。

「痛み（pain)」もハーディをニューマンと結びつける。ハーディは痛みを介して人類は他の諸動物や植物と共感すると考えて、それを彼の愛他主義に発展させた。一方、ニューマンは*The Idea of a University*（1873）で紳士を定義して、他人に「決して痛みを与えない人」であり、自分自身は「痛みに身を委ねる」とする。他人には痛みを与えず自分は痛みを感じるという点が、ハーディの愛他主義と似ている。痛みという物理的な感覚を思想や倫理という哲学的なものにまで発展・昇華させて、価値判断の基準としたという点でハーディとニューマンは共通している。

共通しながらも、違いは小さくない。ニューマンの痛みは紳士に限定される。人類の半分を占める女性はそのリストから排除されるし、西ヨーロッパ中心のようだし、労働者階級は紳士といわないだろうから、ニューマンの視野は狭い。一方、ハーディの痛みは無限大である。性の境界、種の境界を知らず、もちろん国境も知らない。そういう点を考慮するならば、ハーディはニューマンを超えてしまったのではないか。

1875年にも文体の研究のためにアディソン、マコーレー、ギボンなどと並べて、ニューマンを読んでいると記しているハーディが、1891年になると批判的になって、「論理的で思慮分別にも富んでいるという馬鹿げた評判の狂信者（enthusiast)」だと書き記す。*Jude the Obscure*にもジュードが見る幽霊のひとりとしてニューマンが現れて「狂信者」と描写されている。ハーディはニューマンをそう呼ぶが、オーウェン・チャドウィックはそれを否定して、「ニューマンはあからさまに感情に訴えるのをとても嫌った。古いタイプの高教会の信徒すべてと同じく、熱狂に対する恐れを受け継いでいたし、信仰で感情的になることを避けていた。熱狂は過ちの印と考えていた」と書いている。ニューマンを狂信的だと考えたのはハーディがニューマンたちを批判する記事（*Apologia*、第3章 1839年の記述参照）に影響されたとしか考えられない。20代のものの見

方が40代になって大きく変わることは不思議ではないが、ニューマンについては、ハーディの評価の変わりようは驚くほどである。

ハーディのニューマンについての評価の変遷を、リベラリズムとドグマティズムの対立軸で考えると分かりやすい。前者のチャンピオンがジョン・スチュアート・ミルで、後者を代表するのがニューマンである。ニューマンは生涯をリベラリズムとの戦いに捧げた。彼が死の前年の1879年5月12日に枢機卿に叙せられたときには、「30年間、40年間、私はキリスト教内のリベラリズムの精神に全力で抗ってきました」と語っている。*Apologia*でもドグマの対極にリベラリズムを置いて、「リベラリズムで私が意味するところは反ドグマの原則とその発展型である」と明言している。ドグマをニューマンは重視したが、ハーディはそれを強く批判した—「年をとるにつれて、あの恐ろしい、教条主義的な教会組織—いわゆるキリスト教（しかし実際にはパウロ主義［Paulinism］と偶像崇拝)—が道徳や宗教に及ぼす影響がますます嘆かわしくなる、キリスト教の実際の教えとはほとんど無関係な教義（ドグマ）が。」この時期にはニューマンはハーディと同じ道を辿る旅人ではなくなっていた。

ハーディが最終的に評価したのはシェリー、ミル、スウィンバーンであって、三人とも無神論者にして自由主義者であった。特にミルについては、19世紀の「最も深い思想家の一人」と絶賛している。ミルは父親譲りのレッセ・フェールからリベラリズムに傾いていった。彼のリベラリズムの中心は「多数派による専制（the tyranny of majority）」を批判することにあった。かつての少数派が多数派になったときに昔を忘れて少数派を抑圧し迫害することがよくあるが、キリスト教はまさにその過ちを繰り返していると批判した。ハーディは後半生でこの大衆の専制の愚かさを直接、間接に描いて批判している。ジュードやシューが多数派から疎外され、迫害されたのはその例だ。ニューマンのために弁護しておけば、宗教家が大衆を批判することはあり得なかった。愚かで無知である故に大衆は導きを必要としたのであり、そういう大衆を導くのが宗教家の勤めであった。大衆をモブと考えて批判したハーディやミルとはその点でも異なっていた。

ハーディがニューマンから多くを学んだように、ハーディの研究者もニューマンから学ぶことは少なくない。それどころか、21世紀の大学に身を置くものにとってニューマンは無限のインスピレーションの源でもある。「教育が男女の職業教育のためのものに変質するなら、それは自らを貶めることになる」（*The Idea of a University*）という彼の言葉は現代日本の教育者には警句として強く響く。

テクストとパラテクスト
円本時代の『ダーバヴィル家のテス』

上　原　早　苗

日本におけるハーディの受容史でひときわ高く聳える小説はというと、15名もの翻訳者・研究者により繰り返し翻訳されてきた『ダーバヴィル家のテス』であろう。この小説が日本で広く読者を獲得した一契機に、昭和初期の円本ブームと大衆読者層の誕生がある。円本とは、毎月一冊一円で配本された全集のことを言い、関東大震災で打撃を受けた改造社による起死回生の策、『現代日本文學全集』（昭和元年配本開始）の刊行に端を発している。読者にとりそれまで高価だった文学書が一円で入手できたため、改造社の企画は大いに当たり、『現代日本文學全集』の契約件数は20万を超えたという。改造社の成功を目の当たりにした他の出版社がこの事態を黙っ

て見ていたはずはなく、二匹目のドジョウや三匹目のドジョウを狙って類似の出版事業が次々と企画され、最終的に円本の種類は250を超えたらしい（橋本求『日本出版販売史』）。このブームを背景に大衆読者層が誕生したことから、円本の隆盛は日本の出版文化史におけるメルクマールとも言うべき事件であった。円本誕生以前、『テス』は主として一握りの教養ある読者に読まれたテクストだったが、円本ブームに乗って、新潮社『世界文學全集』や改造社『世界大衆文學全集』（昭和2年配本開始）などに収録され、広く人口に膾炙されることとなったわけである。

円本のなかでも、作品・翻訳者の選定の基準の高さやエンド・プロダクトの良質さで知られたのが、新潮社『世界文學全集』である。新潮社の社史によると、企画は社主佐藤義亮が練ったもので、実際にあがってきた翻訳原稿を佐藤自らがチェックし、翻訳者が大家であっても遠慮せずにクレームをつけたという。また『世界文學全集』の各巻には、外国文学に不慣れな一般読者の便宜を図るべく、翻訳テクストの前に比較的詳しい解説が配され、付録として「世界文學月報」が付された。

小説本文（テクスト）に対して、序文、あとがき、解説などは副次的なテクスト、すなわちパラテクストと呼ばれ、パラテクストはテクストの一部を構成するものと、当該テクストの外にあるものとに大別される。序文、あとがき、解説などは多くの国の刊行物に見られるパラテクストだが、付録の月報はすぐれて日本的なパラテクストだと言えよう。書籍本体に綴じられることの多い現在の月報とは異なり、当時の月報は、スクラム製本冊子——二つ折りにした用紙が重ね合わされ、新聞のようにまとめられている——で、各巻に挿み込まれた状態で読者に届けられた。月報が普及したのは円本の誕生と関わっており、改造社『現代日本文學全集』の付録「文學月報」がその先鞭をつけたとされる。

新潮社『テス』の付録「世界文學月報」第23号（昭和4年2月20日号）を一瞥すると、月報は8ページからなり、写真が多く配されているのがわかる。例えば4ページ目は、「映畫の『テス』」と題して、大正13年公開のアメリカのサイレント・フィルム *Tess of the d'Urbervilles*（ブランチ・スィート主演）の写真6葉が紙面一杯に配されている。また、小説のクライマックスの地となるストーンヘンジやテスを演じた舞台女優ガートルード・ビューグラーの写真なども掲載されており、「世界文學月報」は現在の読者にとっても視覚的に楽しめるものとなっている。

と同時に、月報は、小説テクストの読み方を一般読者に教示する機能も果たしただろう。『テス』の前月に配本された『ポオ傑作集』の付録「世界文學月報」第22号（昭和4年1月15日号）を見ると、見開き2ページが『テス』の予告のエッセイにあてられている。例えば田村豐策「純なる娘テスの物語」によると、

> 『テス』の筋は極めて簡單である。古今東西の大小説にしてこれほど簡單な筋のものは恐らく二つとあるまい。卽ち純なる田舍乙女のテスが、嫌な男から誘惑されて、その貞操を汚されたのが原因で〔中略〕やがて死刑につくといふ筋である。

「誘惑」という言葉はあるものの、「嫌な男から」「貞操を汚された」とあることから、田村がチェイスの森の出来事を凌辱と解していたのがわかる。同じく第22号の「次回配本豫告」を見ると、『テス』は次のように紹介されている。

> この『テス』は、純なる田舍娘であるテスの哀れにも、いぢらしき生涯を描いたもので、いかなる人も滿眼の涙なくして讀むこと能はざらしめる。性的誘惑に會つて、嫌つてゐた男からその身を汚される。〔後略〕

ここでも「誘惑」という言葉が使われているが、「嫌つてゐた男からその身を汚される」とあるため、「次回配本豫告」もまた凌辱説をとっていると言える。チェイスの森の挿話を誘惑と解するか、それとも凌辱とみなすかは、挿話そのものだけでなく、テスを欲望の主体と見るか、欲望

の客体とみなすのか、という問題にも繋がり、多くの研究者を巻き込んだ長きにわたる論争の歴史がある。が、『テス』の本格的な受容の揺籃期に、月報では挿話が凌辱の物語として紹介されているのだ。

とすると、『テス』の配本に先んじて読者に届けられた「世界文學月報」第22号は、チェイスの森の挿話を凌辱と読むよう、読者に働きかけていたことになる。先行的パラテクストがテクストの読みにひとつの強力な視座を与えて読者の読みをある方向へ誘導している事態、と言い換えてもよいだろう。さらに、この月報の行為を承認するかのように、『テス』の翻訳者・宮島新三郎は解説で「若主人アレク・ダアヴァヴィルから想ひを懸けられ、〔テスは〕遂に辱められて、家に逃げ歸り母親となる」と述べているのだ。『テス』という小説テクストは円本ブームに乗り多くの読者を獲得したが、それと同時にパラテクストを介して、「凌辱」された可哀想なテスの物語も広く流布しただろう。

我が国の外国文学の受容史や出版文化史を語る上で、円本時代の月報は極めて興味深い資料なのだが、書籍本体に綴じられていないため散逸しやすいものでもあった。勤務先の図書館でも『世界文學全集』は全巻揃っているが、「世界文學月報」は一部も残っていない。

『二つの野心の悲劇』再考 —— 聖書との関わり

小　田　　稔

長引くと予想された家庭の事情から協会を脱退させていただいたのに、原稿の相談が飛び込んできた。石井さんの熱意に太刀打ちできず、厚かましく引き受けてしまった。思い返してみると、『二つの野心の悲劇』については、以前、投稿させていただいたことがある。瀕死の重傷を負ったユダヤ人を助けるサマリア人、『タンホイザー』に登場する巡礼とエリザベートを念頭に置きながら、物語の構造を探ってみた。今回は、視点を聖書に絞り、紙幅の許す範囲で、ハーディがこの物語に託した思いをたどってみたい。

ジョシュアとヨシュア

兄の「ジョシュア」という名前は、『ヨシュア記』の主人公を想起させる。ヨシュアはカナンの地を征服したが、征服を自分の手柄とはせず、主の特別な計らいによるものとして主を畏れ、「真心を込めて誠実に」主に仕えなければならないと、自分に言い聞かせる。己の業績を驕らず、すべてを主の意志の発現と感謝するヨシュアには、謙虚さがある。

ヨシュアについては、もう一つ注目しておきたい点がある。自分を絶えず神と対面させて自分の罪を意識し、不断の懺悔と改悛によって神の赦しを求めていることだ。ヨシュアは、主に背けば、主は「災い」を下し、背いた者を「滅ぼし尽く」してしまうだろう、とイスラエルの民に説いている。神がヨシュアを見捨てなかったのは、「背き」に関するヨシュアの真摯な思いを承知していたからでもあった。

物語の冒頭で、聖職を目指しながら聖書を読んでいるジョシュアに出会うと、読者は本能的に『ヨシュア記』の主人公を思い出す。そしてそれと同時に、罪の意識、不断の懺悔と改悛を忘れることのなかったヨシュアの謙虚な生き方を、「キリスト教の真髄は謙虚さにある」と主張するジョシュアも見せてくれるのでは、という夢を抱く。

「主よ、願わくばわが助けとなりたまえ」

ジョシュアがナラボーンの教区教会で処女説教のテキストとした「主よ、願わくばわが助けとなりたまえ」という文言は、『詩編』第三十編に由来する。自惚れから神の怒り買っていた『詩編』の作者が、自分の罪を自覚したときに唱える言葉である。『ＡＴＤ旧約聖書註解 12 詩編 上』と『ウェスレアン聖書注解 旧訳編 3』によると、作者は、自分の命は自分の手で支えることができると自負していたが、死の恐怖に直面したときに初めて、自分が神の手によって心身の苦しみから脱出することができたことを悟る。そして、自分の力で自分の生の土台を築いていたと思い込んでいたものが、実は「神の恵み」にほかならないことを自覚する。「神の恵み」によって「正しい道」を見出すことができた作者は、神への感謝を表明するだけではなく、将来における助力も懇願するために、「主よ、願わくばわが助けとなりたまえ」と唱えるのであるが、その前提には、神の赦し、哀れみ、救済へとつながる罪の自覚、真摯な懺悔、及び、神の助力を求める謙虚な祈願がある。

教区教会で『詩編』からこのテキストを選んだジョシュアは、『詩編』の作者とは本質的に異なる。『詩編』の作者のような謙虚さ、罪の自覚、懺悔、神助を求める真摯な思いのないことを既に知らされている読者は、「偽善者」と言いたくなる。

「杖」と「若葉」と「白」

ハーディはなぜ「杖」と「若葉」と「白」を結末部に持ち込んだのか。

「若葉」をつけた「杖」のイメージは、『民数記』に由来する。主の命によって部族長の名を書いて持ってこさせた12本の杖のうち、アロンの名が記されている杖だけが芽を吹く。このことはアロンを長とするレビ族が、神に選ばれたことを象徴し、さらに、アロンを介した救済の実現を予言する。『二つの野心の悲劇』で「若葉」をつけた「杖」の持ち主は、山なす教義を背負ったジョシュアではなく、そのジョシュアがカナダへ追放した父親である。

ハーディは、きらめく「若葉」の「白さ」に読者の目を引きつけようと、わずか九行の記述の中で、三回その白さに言及している。『ヨハネの黙示録』に、地上の平和の略奪と殺人を象徴する「赤い馬」、飢餓と冥府を象徴する「黒い馬」、疾病と死を象徴する「青白い馬」が登場する。そして、これらの馬が象徴する諸悪に対抗するものとして、誠実、公正を象徴し、「正義」の裁きを経て「義の実」すなわち「救い」を示現する「白い馬」が登場する。騎手は、ほかならぬイエス・キリストである。ハーディが、若葉の白いきらめきをとおして、水車大工をキリストと結びつけようとしていることは明らかだ。

「杖」の持ち主は、ナラボーンに向かうとき、「勝ち誇ったように」その「杖」を振り回している。この「勝ち誇った」と同根の理念が、ジョシュアの描写にも使われる。ジョシュアは背負っている「教義の山」を、「勇士が**勝ち得る**誉れと栄光」のために、「全力を挙げて守り抜く覚悟であった」とある。勝者には「誉れと栄光」が与えられるという思想も、『ヨハネの黙示録』の中で述べられている。「勝利を得る者」という文言が、第二章と第三章だけで五回登場する。何に対して勝利を得るのか。無論、赤、黒、青白の馬が象徴している諸悪である。そして、その諸悪に勝利した者には、「誉れと栄光」が与えられる。物語の中で、その資格が与えられる者は、芽吹いて「白」い「若葉」を付けた「杖」の持ち主であることを、ハーディは示唆している。

父の「杖」から芽生えた「白」い「若葉」は、自分が神への奉仕者として本当に神に選ばれているのか、という深刻な疑問にジョシュアを直面させ、懺悔・改悛へと至る心の扉を開かせる。ハーディが「理性、意志、心情などの諸面において最も完全な姿を備えた」人と評価しているキリストと比較すると、水車大工に人を懺悔・改悛へと導く力があるのだろうか、と疑いたくなる。父の行状を見ると、「お前らの魂をぶっ潰してやる」とは口走ってはいるものの、助けを求めながら溺死していく父の心に、自分の命に代えて息子の魂を救済しようという目的意識は、一かけらも宿ってない。それにもかかわらず、父の「杖」から芽吹いた「白」い「若葉」は、溺死を傍観した息子をキリスト＝最高真理と対面させ、結末は暗示的な記述となっているけれども、救済へと至る道を提供している。

聖職者が父を見殺しにするというこの物語から、キリスト教への批判、階級意識や偽善などへの攻撃意識を汲み取ることはできる。しかし、思考をここで停止させてはらない。ハーディの狙いは、これ以上の所にある。素性・職種のいかんを問わず、すべての人は救済する力を宿している、ということ語りたかったのではないか。救済は特定の職種に関わる人たちだけの専有物ではない。すべての人は救う人であると同時に救われる人でもある、という思いを、逆説的に表明したかったのではなかろうか。大日如来を中心にいただく胎蔵マンダラが啓示している思想に、一脈相通ずるものがあるように思われてならない。

ハーディの小さな詩をめぐって

小　野　俊太郎

ハーディについてのエッセイの執筆依頼を受けたとき、とっさに思いついたことがある。愛してやまない阿部知二訳の『緑の木蔭』と、翻訳が発表された数年後に描かれた小磯良平の「斉唱」とを並べたら何か見えてきはしないだろうか。あるいは、『帰郷』の冒頭でエグドン・ヒースの情景をアイスランドやアルプスやスヘフェニンゲンと結びつける想像力と、十九世紀の旅行ブームやクックの旅行案内を関連させたらどうなるのか。どちらも妄想だが「考えるのは自由」（シェイクスピア）だし、そうした空想を誘う魅力が、ハーディ作品にあふれているのは先刻ご承知の通りである。

だが、せっかくなので、私の埒もない妄想を追求するのではなく、ささやかなハーディ体験を書き留めておきたい。五年ほど前に、都内の大学で英文科の二部のコースが終焉を迎える時の授業を担当したことがある。どさくさ紛れに、十八世紀以降の英文学史を任された。一年限りの約束だったので、具体的な作品に触れながら、魅力を伝えるほうが学生のためになると思い、そのひとつに「彼を埋葬するときの彼女（“She, At His Funeral”）」を選んでみた。

八行の短い詩である。拙訳で紹介すると、「みんなは彼をやすらぎの場所へと連れていく――／這うような緩慢な葬列に／私はよそ者として離れて付き従う／あの人たちは彼の身内、私は恋人。／派手に染めたガウンを私は変えなかった／あの人たちの服装は悲しみの黒だったが／でも、あの人たちは悲しみを欠いた目で囲んで立っていた／私の哀惜が炎のようにこの身を焼き尽くしている間」とでもなるか。拙い訳でお恥ずかしい限りだが、現場に立ち会っているような現在形のニュアンスなどはとても訳しきれない。

この詩のすばらしさは、何よりも情景が目に浮かぶことだ。脚韻（“by-I-dye-eye”）がそれを支え、しかも否定を含んだ二つの言葉（“Unchanged, griefless”）が、この埋葬の空疎さを浮かび上がらせる。埋葬者の服装は黒い喪服だが、悲しみが見せかけばかりであることを痛烈に批判している。ひょっとすると、死者の「愛人」か「娼婦」かもしれない「私」が注ぐ愛情の深さが、たった八行の詩に込められていて、誰もが驚き納得するだろう。

ここまで読み解いた上で、ハーディの本意とは大きく逸脱する読解を行った。これを宗教詩の文脈に位置づけたらどうなるのか、という内容だった。たとえば、「彼」と「私」の関係を、キリストとマグダラのマリアとなぞらえたらどうだろう。また、形式主義的な宗教的権威との違いを訴える詩として考えると、「派手に染めた」色が痛切な訴えになっている気がする。そして、ロバート・サウスウェルの「燃えさかる幼子」などの宗教詩を持ち出すと「焼き尽くす（consume）」という語が、殉教的な狂熱を表しているようにさえ思えてくる。このように詩は過去の詩とつながりや対決をしながら新しく生まれているのだ、といったやり取りをしたら、授業を受けていた三人のうちの一人が詩の魅力にはまり、ハーディではなかったが、卒論の題材にある詩人を選び無事卒業した。これもハーディの功徳と言える。

あれから五年が経過して、もう時効だろうから、この詩を選んだ真意を語ろうと思う。もちろん、ハーディのこの詩は短いなかに韻律やイメージが見事に配置され、「映画的」（ディヴィッド・ロッジ）だと理解させるのが、文学史の授業としての目的だった。それと同時に、埋葬されていくのが、廃止される英文科や英文学であり、そうした喪失を「悲しみを欠いた目」で見守ってほしくなかったのだ。詩の中の「変えなかった」という力強い言葉を礎にして、大学で学んだハーディの詩や英文学の遺産を埋葬せずに、卒業後も生きていって欲しいと願ったのである。人生のどこかでふと思い出して、勇気をもらうのも、詩の魅力のひとつだろう。この詩を久しぶりに読み返して、詩人ハーディの火のように熱い思いを、私が貰い受けたのだけは間違いない。

「ハーディと私　その後」

鈴木　　淳

トマス・ハーディを研究し始めてから何年が経ったのだろうか、と今回の原稿依頼を頂いて考えてみた。すると、大学2年のときからなので、軽く20年を過ぎていたことに気がついた。ずいぶん長く一つのことに集中してきたものだと思うが、ただその「一つ」のことがまったく一つではないことにも気がつく。中心はたしかに「ハーディ」という一つなのだが、その中心も実は「小説」と「詩」に分かれており、さらには小説一つを取ってみても、それ自体が持つさまざまなテーマ、そしてまた他の作家との比較など、一つではなく「色々」なのだ。本当に色々なことを20数年の間にしてきたのだと驚く。でも、やはり「色々」ながら、中心は常にハーディという「一つ」だったとも思う。

おそらく、ハーディ協会の先生方や大学院生たちも同じ感覚なのではないかと思う。ハーディ協会の多くの先生方はさまざまな学会に所属し、さまざまな作家について論文を書いている。でも、中心はハーディのような気がする。私自身、現在はセンセーション小説全般を研究対象にしているが、そもそもコリンズを研究したのも、「ハーディに似ていて読みやすい」という理由だった。あくまで私自身の感覚にすぎないのだが、ハーディの小説から哲学的な部分を差し引いて、プロットをより面白くしたものがコリンズの小説なのだ。もちろん、そこにはコリンズ自身が「大衆」読者を意識していたことが大きく関係している。実際に、コリンズとハーディの小説には「運命」や「偶然」、また「家系」などテーマが重なっている。しかし、コリンズの場合には、あまりハーディのような悲観主義は感じない。あくまでも小説のプロットを面白くするためのモチーフなのだ。だからこそ、純粋に面白く読める。それはまた、コリンズにとって、問題は「運命や偶然」ではなく、生身の人間の「欲望」の動きこそが重要なのだということを示してくれているような気がする。

これまでの自分の研究内容を振り返ると、テーマとしてもセンセーション小説だけでなく、ヴィクトリア朝当時の科学的言説やジェンダー、帝国主義、そしてニューウーマン小説など、さまざまな角度からハーディという中心をとらえようとしてきた。「とらえようとしてきた」と書いたのは、これがまた「一つ」であって「色々」ということであり、それがまたハーディを20年以上続けてこられた理由でもあると思う。簡単に言えば、ハーディの作品は非常にさまざまな角度からの解釈を受け入れ、またそれがほとんどすべて間違いではないということである。ハーディについての先行研究を見てみると、ジャンルや理論、ジェンダー、階級、戦争などの大きなものから、「食べ物」や「衣服」、「動物」など細かいところまで、ありとあらゆるテーマで論じられている。それらを全部あわせると、本当に「ハーディ」という一人の人間を表せることに驚く。しかも、もっと面白いのは、ハーディ研究者の各論文を見てみると、それが研究者自身の個性にもなっていることである。研究書や論文を読んでいて、「このテーマだと誰が書いたのか」が大体分かり、ハーディを通してその研究者自身の関心や個性が最大限に生かされているのが分かる。各研究者が続けてハーディを研究しているのは、ハーディを通してそれができるのが嬉しいのだと思う。

今回、「ハーディと私　その後」という依頼だったが、実際に私自身もハーディとつながっているということが起きた。それこそ「偶然」だが、今年の2月の終わりから、20数年まったく触ることのなかったヴァイオリンを再び始めた。もともと音楽大学を目指していたが、高校2年で音楽をやめてからヴァイオリンをまともに弾くことは今まで一度もなかった。したがって、ヴァイオリン曲にも関心がなかった。しかし、ヴァイオリンを再び始めてから、エドワード･エルガーの『愛の挨拶』という曲を聴き、それをぜひ弾いてみたいと思った。その後にエルガーがイギリスの作曲家であることを知り、時代を確認すると1857年生まれで没年が1934年。「あれ、どこかでこんな感じの人を見たことがある」と思い、すぐに分かった。まさに、ハーディと同時代人なのだ。その曲を気に入ったのも納得した。さらに、気になってハーディの伝記を調べてみると、エルガーがハーディの小説をオペラにする構想もあったという話が記されている。これは有名なエピソードなのだろうが、もしヴァイオリンを演奏していなければ、私はそのことに興味も持たなかっただろう。何より、私のヴァイオリンもエルガーを通してハーディとつながっていたということにただ驚いた「ハーディと私　その後」であった。

ハーディと私
ハーディに会った人に会った話

吉　田　朱　美

この記事をお読みの皆様なら誰しも、何かしらの形でハーディに出会ったという忘れ難い経験をお持ちのことかと思います。私の場合、小学生の頃に目にした新作の『テス』の映画の割引券が印象的だったのを覚えており、それが最初の出会いであったようです（実際に作品に親しむようになるのは高校に上がってからでしたが）。しかし、生きているハーディ氏と触れ合ったという経験をお持ちの方はなかなかいらっしゃらないのではないでしょうか。私自身、そもそもこの世に生まれてきたタイミングからいっても、もはやどうしようもなくすれ違ってしまっており、そういった機会を得ることは到底かないませんでした。ただ、生前のハーディとお会いになったという方と偶然お会いする機会に恵まれ、これだって十分特筆すべき経験なのではないかと思われたため（もしかして、先輩の諸先生方にとっては特段珍しくもない経験だったりしますでしょうか？万一そうだとしても私自身にとってはやはり特別な思いのある出来事ですので）、この場で披露させていただくことにいたします。

ちょうど10年前のことです。2008年の夏、深澤俊先生にかなり強力なお誘いを受け、ドーチェスターでの国際ハーディ学会へと連れていかれました。2年に一度のこの学会、開催時期を早めたがる先生が海外には多いようなのですけれど、副会長を務めておいでの深澤先生は日本のハーディ研究者が参加しやすいように頑張って交渉を続け、早くなりすぎないように尽力してくださっているとのことです。しかし、大学でのお勤めから引退されている深澤先生だけでなく現役の教員たちも積極的に日本から参加しないことには、その主張が説得力をもちえなくなるため、この年は吉田が貢献することになったわけです。初めて訪れたドーチェスターは、ハーディ小説から想像していたような薄暗い重苦しい空気をまとっているようには特に見えず、小ぢんまりとまとまった街並みが美しく、明るくおしゃれな雰囲気でした。深澤先生が、ハーディやウィリアム・バーンズゆかりの建物を指さしながら案内してくださいます。現地で、当時ケンブリッジで研究されていた清宮倫子先生と初めてお目にかかることもできました。

“International Thomas Hardy Conference and Festival”と題されているこの催しでは、学術的な講演や研究発表のみならず、ハーディの詩のpoetry readingや、ハーディ作品ゆかりの地をめぐるバスツアーなど様々なイベントを楽しむことができます。私はこの年、『塔の上の二人』の舞台のモデルとなった「塔」の敷地への立ち入り許可が特別に得られたことにより実現したという“*Two on a Tower* Tour”に参加しました。同時間帯に清宮先生が参加され楽しんでいらした“*Tess* Tour”の方にも興味があったのですが、深澤先生から「『テス』・ツアーはいつでもあるから」と説得されてしまいました。つまり、「『テス』・ツアー」を体験したいならば、またドーチェスターに戻ってくるべしということなのですね。

学会のメイン会場であるユニテリアン・チャーチは街の中心部にありますので、休み時間にはその近くの様々なお店を覗いたり、スーパーマーケットにおやつを買いに入ったりしておりました。スーパーで菓子パン他少量の品物を持ってレジに並んでいた時に、出会いは起きました。かごにたくさんの食料を詰めて私の前にいた綺麗な白髪の上品な女性が、「あなたは少ないから先にどうぞ」と順番を譲って下さろうとしたのです。せっかくのお申し出でしたが、「いえ急いでおりませんので、あなたがお先に」のような返事をしてゆったり待つことにしました。

レジを抜け、品物を袋詰めにするところで再び合流したこの女性から、「どこから来たの？」と訊かれます。「日本から、トマス・ハーディ学会のため来ました」と答えたところ、途端に

勢いのある生き生きした反応が返ってきました。“Thomas Hardy Conference! Mr. Thomas Hardy patted on my head!”トマス・ハーディに頭をぽんぽんと撫でられたことがあるというのです。失礼なことに一瞬、この方は何か勘違いされているのではないかと疑ってしまいました。なにしろそれより80年も前に、ハーディは亡くなっていたのですから。しかしさらにお話を伺ううちに、そのような疑いは消え失せました。この女性はその頃２歳ぐらいで、ハーディの暮らしていたマックス・ゲイトのすぐ近隣にお住まいだったそうです。お会いしたころの「ミスター・トマス・ハーディ」は既にかなり体が弱り、ほとんど座りきりの状態だったようだ、とおっしゃっていました。

冒頭近くで述べたように、やや強引に引っ張られていったようなところもあったのですが、結果的にドーチェスターに行かなければ決して出会えなかったはずの方とこうして出会うことができ、ハーディと自分との間にも何か特別な縁が結ばれたように感じられ、やはり出かけてよかった旅であったと思っています。

ハーディに頭を“pat[ting]”された彼女にはいつまでもお元気で、ハーディ学会の参加者に貴重な思い出を語り続けていていただきたいものです。

表紙の写真によせて
ウィリアム・バーンズからハーディへと続く “The Last Signal”

今　村　紅　子

トマス・ハーディの故郷であり、ウェセックス小説群の舞台となったイングランド南部ドーセット。茅葺き屋根の美しいHardy's Cottage。ハーディ自身が設計したMax Gateにはキプリングや R.L.スティーヴンソン、J.M.バリーなども足を運んだ。書斎からは文豪たちの笑い声さえも聞こえてきそうだ。のどかなイングランドの緑あふれる地には、いたる所にハーディの痕跡が刻まれている。英国ハーディ協会会長のTony Fincham氏の先導のもと、8時間かけて*Tess of the d'Urbervilles*の舞台をたどるTess Anniversary Walkに参加すると、小説の登場人物たちの息吹を感じることができた。Dorchester Southの駅に降り立った瞬間、乾草の匂いのするドーチェスターの街には、時空を超えてハーディの世界へ人びとをいざなう不思議な土地の力があることを感じた。

そんな私のハーディカントリー体験の中で印象に残ったのは、イングランドの美しい緑やローマ時代の遺跡ばかりではない。町の目抜き通りにあるDorset County Museumに寄り添うようにたたずむウィリアム・バーンズ（William Barnes）の銅像の写真を思い出の一枚としてここにあげようと思う。バーンズはドーセットゆかりの言語学者であり詩人で牧師でもある。ハーディが16歳の少年時代から人生の師であり友人でもあった。アングロ・サクソン語を起源とする言葉の大切さを説き、土地固有のドーセット方言を使った詩作をした。サクソン語に基づいた複合語を提案したことは、ハーディの“dewfall-hawk”のような複合語に受け継がれている。

ハーディ詩集*Moments of Vision* に収録された“The Last Signal”は、1886年のバーンズの死に際してハーディが彼の功績と約30年にわたる友情への想いを詠った挽歌である。Samuel Hynesも指摘したように、亡き妻を想いハーディが紡いだ*Poems of 1912-13*以外に“The Last Signal”ほど他者への感情的な絆をハーディが表出した作品はほかにないだろう。そしてバーンズ自身が農

民の息子でありながらハーディ同様に向学心に突き動かされた姿は、のちにJudeを生みだすことになる。ハーディは“The Last Signal”のなかにバーンズの用いた技法を採用しながら敬意と追悼の意を表している。詩の中で繰り返されるWelsh cynghaneddはウェールズ語の詩で用いられる複雑な頭韻と脚韻などの技法でバーンズが好んで採用した。

ハーディの小説の世界観そのままに、人物がひとり静かに“a spot yew-boughed”（イチイが暗示する墓地）へ続く道を歩く場面から“The Last Signal”という挽歌ははじまる。太陽の光の色が変わる時間帯の西の空と東の空を対比させながら、陽の光に反射して輝く「友人」の棺を「私」とともに読者は距離感をもって見つめる。光に輝く棺は、まるで「私」に告別の最後の合図を送っているかのようである。ハーディの詩を評価したPhilip Larkinの“Church Going”で教会がそうであったように、ドーセットでは人が生まれて、結婚をして、そして死ぬという人間の営みが土地の匂いとともにハーディ作品のなかに生き続けている。

≪シンポジウム予告≫

誌上シンポジウム ‘Candour in English Fiction’を考える

はじめに

上　原　早　苗

1889年創刊の*New Review*は誌上シンポジウムを得意とする雑誌で、1890年1月号には、Walter Besant、Eliza Lynn Linton、Thomas Hardyの3名によってグランディズムの観点からイギリス小説の現状が議論されている。が、ハーディの‘Candour in English Fiction’は、これまでシンポジウムのコンテクストから切り離され、部分的に紹介される傾向にあったように思われる。寄稿者の論点を明確にすることでシンポジウムを立体的に考察することや、ベザントやリントンの観点からハーディの思想を捉え返そうとする試みはあまりなされてこなかったように思われるのだ。そこで、ハーディ協会の大会ではまず、上原が誌上シンポジウムの背景となる当時の書籍界の動向を素描し、次いで、講師の朝倉先生と浮岳先生に、ベザントとリントンのスタンスを明らかにして頂く。最終的には、フロアの先生方にも積極的にご参加頂き、ベザントとハーディの見解、あるいはリントンとハーディの見解の相違を浮き彫りにしつつ、ハーディの希求する‘candour’がどのように達成されうる（あるいは達成されえない）ものであったのか、に光を当ててみたい。

シンポジウム前夜——〈表現の自由〉と〈公共の福祉〉

上　原　早　苗

ベザント、リントン、ハーディの寄稿文を読むと、三者三様のスタンスが読み取れるが、いずれのエッセイにも〈表現の自由〉と〈公共の福祉〉との鬩ぎ合いが通奏低音として流れている。イギリス書籍界に〈公共の福祉〉の概念が浸透するのは、1853年の猥褻文書規制法（Obscene Publications Act）制定以降のことで、この制定法施行をきっかけに、書籍界は想定された読者——「女子供」——を念頭に置きつつ、小説テクストに対する（自己）検閲を強化するようになる。1880年代には、そうした状況に苛立ったヴィゼッテリー社が、「女子供」向けとは言い難いZolaの翻訳テクストを廉価で販売するが、同社の刊行物をめぐって法が作動し、風俗壊乱のか

どで社主ヴィゼッテリーが起訴されてしまう。誌上シンポジウムでは、ベザントとリントンが〈表現の自由〉対〈公共の福祉〉の衝突を示す事件としてこの裁判に触れており、ハーディとリントンが想定された読者の問題に言及している。今回の発表では、想定された読者やヴィゼッテリー裁判とその余波などに着目しながら、シンポジウムのコンテクストを素描してみたい。

ウォルター・ベザントのプロフェッショナリズム

朝　畠　徳　子

‘Candour in English Fiction’ と題された誌上シンポジウムが組まれた際、巻頭論者となったウォルター・ベザントの主張は、次に続くリントンともハーディとも異なった、極めて平明で現実的なものであった。出版市場に蔓延するグランディズムの狭量さを批判したハーディらに対して、ベザントはそうしたものに一定の理解を示し、それを無視すれば今日の作家は作品を流通させることができないと割り切った態度を取っている。ベザントによれば、作家の自由な筆を制限するものは、グランディズムそのものではなく、作品を公表しそれを商品として対価を得ようとする時点で発生する制約であり、言い換えれば、それは職業作家としてのプロフェッショナリズムなのである。

今回の発表では、ベザントの主張の真意を、1890年代におけるベザントの社会活動に関連づけて考察したい。1884年にベザントが創設したイギリス作家協会には、1887年にハーディも協会会員となり、1909年にはメレディスの後を継いで会長に就任している。発表では、ベザントとハーディの主張との類似・相違を明らかにした上で、ハーディのプロフェッショナリズムにも迫りたい。

「若い読者のために真実を」――イライザ・リン・リントンのグランディズム批判

浮　岳　靖　子

‘Candour in English Fiction’ と題された誌上シンポジウムの2番目に登場するのは、小説家として約20作品を発表する傍ら、いくつもの雑誌に寄稿するなどイングランド初の女性職業ジャーナリストとして活躍したイライザ・リン・リントンである。リントンはイングランドにおいてグランディズムが蔓延した結果、Balzacのような真実味のある人間性を描いたり現実の生活を忠実に提示したりすることができない風潮があることを懸念している。そして、そうした「人間生活の最も重要な領域」を描かない代わりに滅多に起こりそうもない犯罪にスポットライトを当てるテーマばかりが選ばれる現実を憂える。リントンは「若い読者（Young Person）」のために真実と社会常識を犠牲にすべきではないと論じる。ではリントンは誰を想定してYoung Personと呼ぶのだろうか。アンチ・フェミニズムの立場をとるリントンの思想も分析に取り入れながら論じていきたい。

≪特別講演予告≫

トマス・ハーディとウォーキング

中　島　俊　郎

トマス・ハーディに ‘The Weary Walker’ という詩がある。“A plain in front of me/And there’s the road/Upon it.” と第1スタンザは始まるが、どこまで歩いて行こうともたえず坂が

あらわれ、それを超えたと思えばまた坂がたちはだかる。果てしない苦行の連続にもかかわらず、歩行者は歩を緩める気配はまったくない。なぜならば、目の前に「道」がたえずあるからだ（“Ever the road!”）。この4行4スタンザからなる短い詩は、たえず創作にいそしんだハーディの作家生涯を表象する隠喩のように思えてくる。だが、「歩行」は作家人生としての隠喩以上に、ハーディにとっては創作の原理をなす重要な行為ではなかったか。

翻れば、ハーディは「歩くこと」に憑かれた作家であった。「歩行する」という人類の根源的な営為を創作原理としたこの作家の作品には小説にせよ、詩にせよ、「歩行」という行動が意味を生み機能させてテクストを生成していく。たとえば*The Return of the Native*の第2章は“Along the road walked an old man.”という一文で始まっていることに注意を喚起すれば十分であろう。この例からみられるように、ハーディにとって、「歩くこと」と「道」は不可分な関係にある。

「道」という視点からハーディ作品を検討する場合、‘The Roman Road’を逸してはならないであろう。母の逝去を契機として書かれたこの詩には幼年時代へと回想をめぐらす小宇宙とローマ時代の英国という大宇宙が同心円のように存在している。そして、こうした両世界（“Now and Then”）を往還する経路として「ローマ道」がある。ハーディは文学的想像力として「ローマ道」を相対化したが、興味深いことにローマ道への考古学的な関心が高まったのもこの時代であった。

本講演では「歩くこと」、「道」、「歴史意識」という視座から、ハーディの詩、小説を分析してその意義を問うと同時に、他のウォーキング文学との類似、差異を指摘しハーディ文学の特質を照射してみたい。

≪内外ニュース≫

会員および執筆者による研究書：

西村 美保著　『ヴィクトリア朝小説における女性使用人の表象：階下から読む８つの物語』（彩流社、2018年3月）

小田 稔著　『真実と虚像の狭間で ―翻弄された自我の軌跡―　（郁朋社 、2018年7月）

小野俊太郎著　『太平洋の精神史:ガリヴァーから『パシフィック・リム』へ』（彩流社、2018年4月）
『ハムレットと海賊: 海洋国家イギリスのシェイクスピア』（松柏社、2018年6月）

≪編集後記≫

大学内外で寒い話題が続いています。人文系の縮小、生産性重視、医大の女性受験者差別。既視感とともに、他人事ではなく自分たちの問題として受け止めずにいられません。役に立つ / 立たないを分けようとする＜境界＞に、誰のどのような欲望が見えるでしょうか。文理融合というも、そもそも文系・理系はいつ、どのような背景のもとで分けられ、どういう結果が待っていたのか。＜境界＞が自明視される時、何が見え難くなるのか。――思えばハーディは、＜境界＞を様々なレベルで思考し、そこに蠢く運動を描いた作家でした。

今号は協会ニュースの場が＜汽水域＞になればと、境界を緩やかにして、元会員・未会員の方からもご寄稿頂きました。小田稔先生は、戦争体験の足もとを掘り起こした新著を、小野俊太郎氏は＜海＞という場に焦点をあて、時代・領域をダイナミックに横断する著書を上梓されています。皆様からお寄せいただいた論考は多種多様で、それぞれのご研究や日常の場面で堆積されてきたハーディとの「遭遇/すれ違い」の延長にある文学の層の豊かさをあらためて深く感じました。学期末のお忙しい時期、玉稿をお寄せくださった執筆者の皆様に、そして中央大学生協印刷部の藤様の変わらぬご尽力に心より感謝申し上げます。次号は新しい編集者のもと、4月発行予定で、原稿締め切りは2月20日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様、奮ってご寄稿ください。尚、ハーディに関する著書、翻訳は編集者までご連絡ください。お待ちしております。